

紀 要

第 14 号

2001. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

中世城館から近世城郭へ

— 湖東地域中央における城館を中心とした大規模な遺跡の動向について —

村井毅史

1. 緒言

湖東地域の中央湖岸寄りには15～16世紀の中世から近世への転換期において、他の追随を許さない大規模な城館を中心とする遺跡が複数存在する。それは安土町金剛寺遺跡、観音寺城下町遺跡、金剛寺城遺跡、観音寺城遺跡、安土城跡と城下町遺跡、八

幡城と城下町遺跡である。既にこれらの遺跡は別稿⁽¹⁾において考察を行った。本稿ではこれらの遺跡の相関関係を考察することによって大規模な城館を中心とする集住形態の変遷を明らかにしたいと思う(図1)。

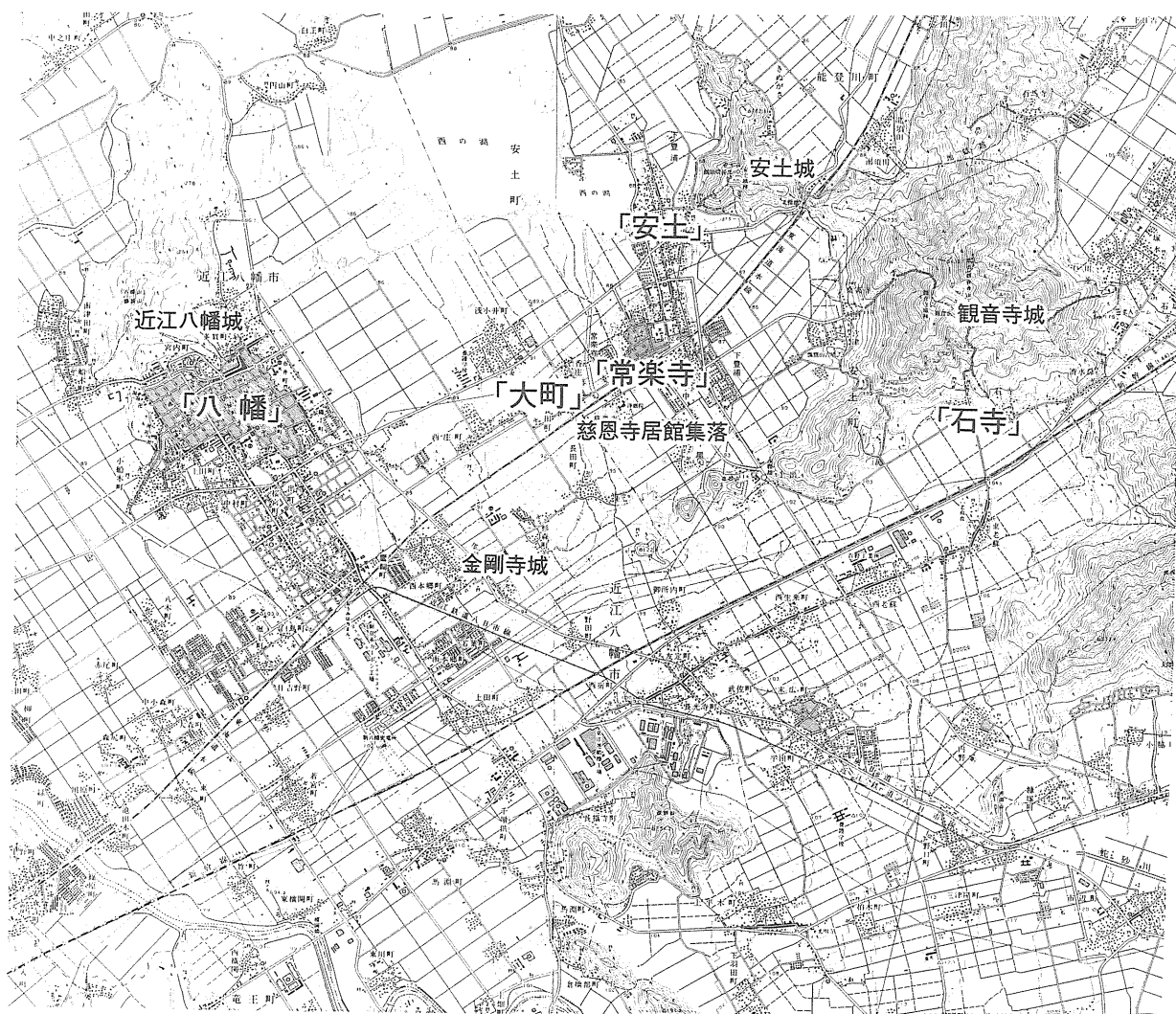


図1 湖東地域中央

2. 各遺跡の概要－1

安土町金剛寺遺跡(慈恩寺の居館集落)の構造(図2)

金剛寺遺跡は大きく2期に分かれるとし、居館として機能したのはI期であるとした。⁽²⁾

慈恩寺の居館集落(金剛寺遺跡) I期 金剛寺遺跡 I期は居館を中心とした居館集落であったとみられる。金剛寺遺跡 II期は遺跡名のもととなった小字名「金剛寺」が示すように寺院であったとみられる。本稿で課題とするのは金剛寺遺跡 I期である。時期は15世紀後葉から16世紀初頭とみられる。

a) 居館 居館は幅8mの濠によって画される。規模は濠内法で東辺140m、西辺130m、南辺105m、北辺105mの居館で、濠内の面積は約14,000㎡あり、同時期としては県下最大の規模を有するとみられる。このことから

居館の居住者は当時の六角氏当主高頼であると推定される。

b) 外区画 居館の南と西に認められる。南外区画は居館の濠に接する東西130m、南北70~80mの単一区画とみられる。西外区画は東西48m、南北150mの広場を挟んで、東西50m、南北36mを一単位とする複数の区画が存在するとみられる。

よって居館と区画群によって形成される居館集落の規模は東西300m、南北300mの大きさに復元できる。

またこの周囲には島状に同時期の遺構群が分布する。特に北側の「大町」は16世紀初頭の文献によってこれ以前に成立していたとみられ、「町」という一般の「村」とは異なる集住形態を形成していたとみられる。

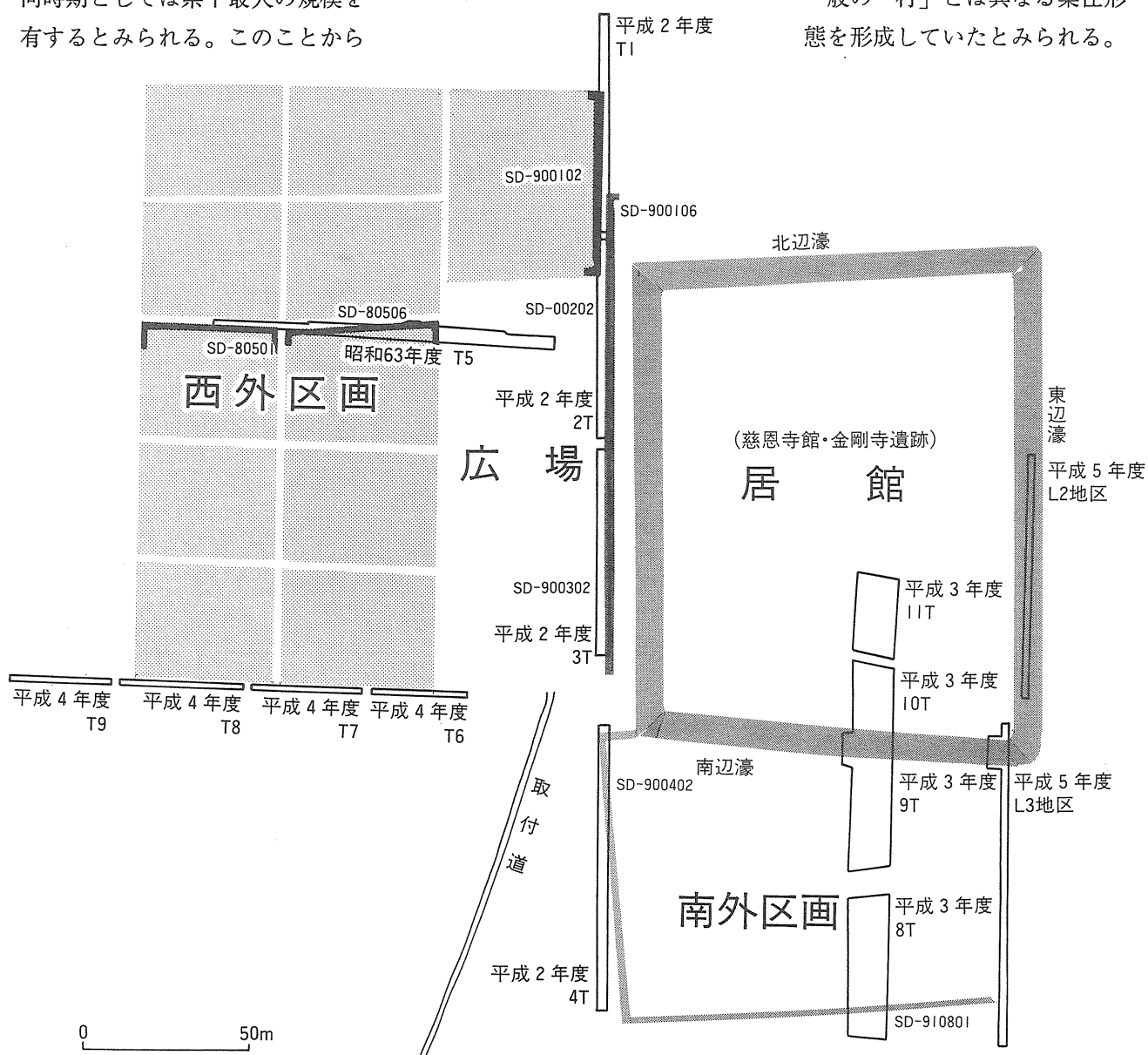


図2 慈恩寺館および居館集落推定復元図 (S = 1 / 2,000)

3. 各遺跡の概要— 2

石寺の居館集落(観音寺城城下町遺跡)の構造(図3)

a) 居館 居館は小規模な谷筋に切り込んで形成されており、南面と東面には石垣が積まれ、規模は幅40m、奥行き75mである。居館入り口の石垣は東側と西側が喰い違っており横矢を意図した形態となっている。

b) 外区画域(外城) 居館の南裾に展開し76m四方を一単位とする複数の区画が存在するとみられる。更にこれを取り囲んで濠が廻っていた可能性が考えられ、観音寺城を背後に持つことから慈恩寺居館集

落I期よりも防御的性格が強いとみられる。居館前方に位置する平成10年度の発掘調査区からは当該時期の遺物が少なく、慈恩寺居館集落I期同様、居館に隣接して広場が存在していたとみられる。

c) 外域 居館外区画を南から包むように形成されており、これとは地割の方位が異なり、条里地割や自然地形に影響を受けており、計画的に形成されたものではないとみられる。

d) 外縁施設群 外域の周囲には島状に、長之町、酒屋町といった地名が分布しており、散在的な居住域が分布していたものとみられる。



図3 観音寺城下町「石寺」復元図 (S = 1 / 5,000)

4. 各遺跡の概要— 3

金剛寺城の構造とその変遷(図4)

金剛寺城の構造はこれまでの発掘調査とその考察及び、出土遺物の検討から大きく3期に分かれるとした。⁽⁴⁾

A. 金剛寺城Ⅰ期

金剛寺城Ⅰ期は居館の規模が条里の1坪半を占めるということ以外は不明である。全体は条里の坪割を継承し自然地形は考慮に入られていない。

B. 金剛寺城Ⅱ期

金剛寺城Ⅱ期は先近世第3形態を採用する。自然地形を活かして主郭を形成し、この北に北曲輪、これらを挟んで東西に東曲輪と西曲輪が形成される、放射状複合構造⁽⁵⁾を採用し、主郭以外は付加系の曲輪で城域を形成する。

C. 金剛寺城Ⅲ期

最盛期の金剛寺城Ⅲ期は、16世紀前葉に属する。外城の規模が南北600m、東西400m、内城を北西隅に配置し、金剛寺が中央東側に立地する。虎口は折れや横矢を用いるものである。

a) 内城 内城の規模は東西150m、南北110mで、内部は主曲輪と西曲輪、東曲輪に分かれ、放射状複合構造⁽⁶⁾を採用し中核曲輪群を形成する。防御線は折れを意識したものである。

b) 外城 金剛寺城には六角氏当主の直率軍の1つである「金剛寺衆」が在城していたとみられる六角氏の軍事拠点である。最近の研究で、金剛寺城のⅢ期は15世紀末から16世紀中頃迄の時期が充てられる可能性が指摘されている。⁽⁸⁾

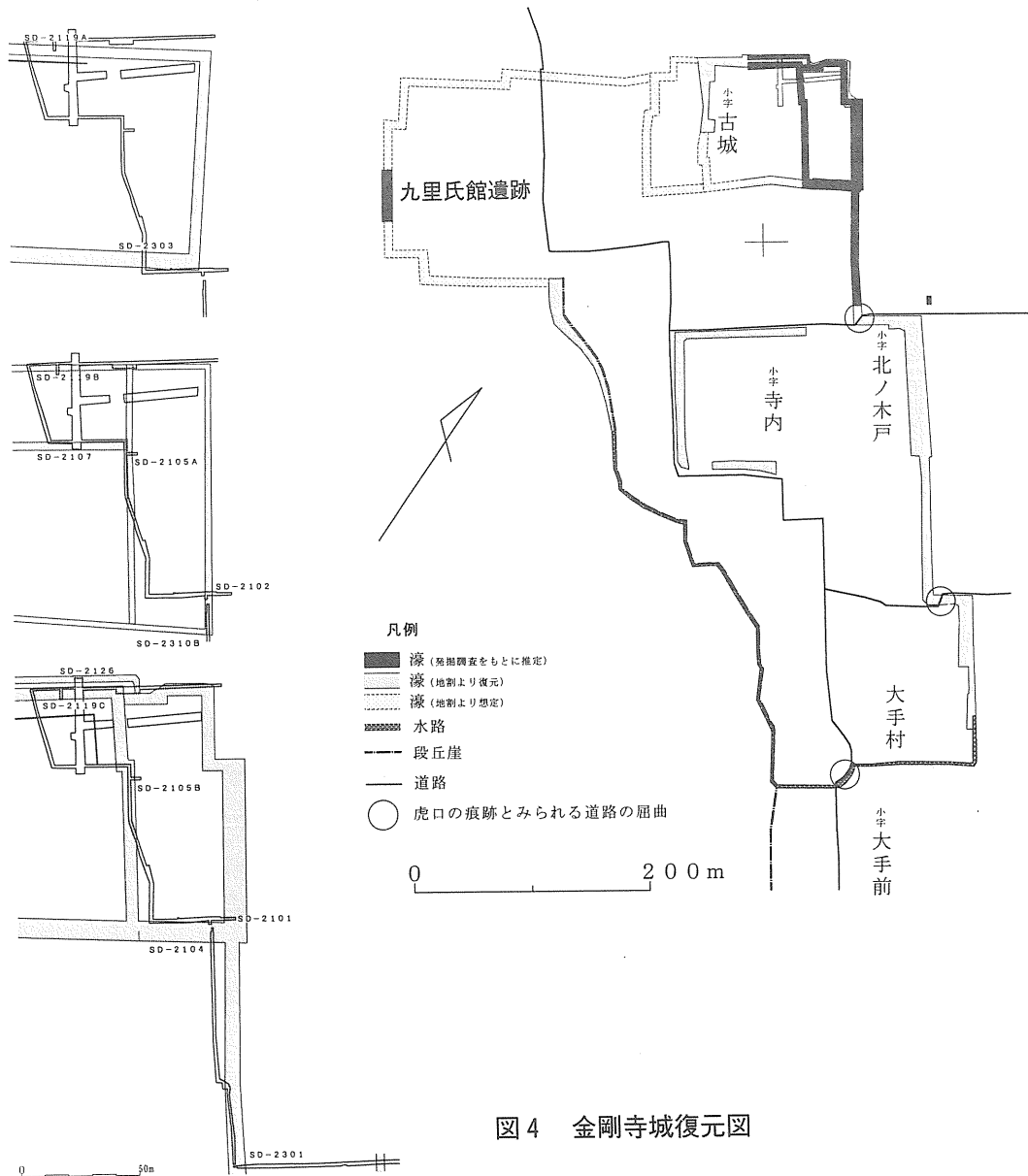


図4 金剛寺城復元図

5. 各遺跡の概要－4

観音寺城及び城下町遺跡の構造とその変遷

観音寺城の構造は大きく2期に分かれるとした。

A. 観音寺城Ⅰ期(図5-1)

現況のプランが確立する以前の状況を観音寺城Ⅰ期と呼称した。構造は内城と外城に分かれる。

a) 内城 山頂部は周囲を急斜面に囲まれた、単独で城郭として機能し得る城郭の防御単位として防衛上の核であったとみられ、主郭として位置付けられていたと考えられる。

内城の東側には三国岩を始めとして巨岩の露頭が認められ、磐として信仰の対象となっていたと思われる。江戸時代の観音寺城跡図によればこの直下の平坦面E1に「根元観音堂」とあり、観音寺城の前身である観音正寺がこの磐を信仰の対象としていたことを示している。

b) 外城 外城は、⁽⁹⁾ 囲繞系の曲輪である。西尾根部では内城から削出土塁が伸び、W1～4迄の尾根上削平地列の北側を囲み、南西端はW4の虎口iで止まる。この南東に位置する、上を小平坦地、下を堅堀に挟まれたoも虎口の痕跡とみられる。

東尾根部では内城から削出土塁が東のピーク“奥の院”迄伸び、これがE1～5の平坦地の北側を囲む。先述したようにE4・5間の削出土塁を断ち切る堀切と、虎口jはこの時期では未だ形成されていなかった思われ、Ⅱ期とは異なり尾根上は土塁によって画された一連の平坦面列であったとみられる。

南斜面上部では下辺の東端に位置するⅡ期の虎口pの位置にE5と連携する虎口が存在したとみられる。南面の虎口は、南斜面中部の南辺中央、本谷から上がって岩盤に突き当りここで東折し、スロープを上がりきったqが南斜面中部中央虎口の痕跡とみられる。

南斜面中部南東隅には虎口pとqの関係から、虎口rがⅠ期まで遡ると考えられる。

外城の規模は東西500m、南北400mを有する。

c) 小括 よってⅠ期の城域は山頂に位置する主郭の内城、北側の尾根を削り出した土塁、南側の虎口i・o・p・qによって防御された、囲繞系の曲輪である外城によって構成され、その外側に南斜面下部、東部が形成された可能性が在り、城域の中心が

北に偏る同心円構造を採用していたとみられる。

虎口qに至るルートは老蘇から直線的に伸び、城下石寺を縦断し本谷の扇状地に入り、そのまま谷を北上する。このルートは老蘇から、八日市を経て八風街道を通り、伊勢の桑名に出、太平洋岸航路に接続する。これは六角氏が重要視していた街道で、虎口qは観音寺城Ⅰ期の大手とみられる。

観音寺城に六角氏当主以下の居住が文献上で確認できるのは『鹿苑日録』天文八(1539)年二月二日条に「虎上司従-観音寺-上洛、霜台神左有-返事-二月旦日付也、四郎殿留山御留主之間…」とあり、霜台(定頼)は山下に居て会うことができたが、四郎殿(義賢)は山上の観音寺城に留まっており会うことができなかったと報告している。また六角氏当主の居住地がここでは「観音寺」として認識されている。

次いで『鹿苑日録』天文八(1539)年二月九日条には円満寺齋了が観音寺城に登り、六角氏家臣神崎左京亮宅におちつき、この後「屋形」に赴き、定頼、義賢と対面し、大原宅で長田、水原、進藤、種村、馬淵ら六角氏家臣の主だったもの達と会っている。

十日には「屋形二階」で五献以下吸物を頂き、小林、奈良崎、小原が相伴している。

十一日には下山し、殿原衆の見送りを受け、深谷から下山しており、このことから、これらの施設や他の家臣の宅も山上に存在したとみられる。

また『宗長手記』天文十三(1544)年十月条に「観音寺登城」「座敷二階」、『東国紀行』天文十三年十月二日条にも「観音寺衆下山参会」とあり、16世紀中葉には山上に当主の「屋形」をはじめ、主だった家臣の「宅」が建ち並んでいたとみられる。

また織山西山腹の桑實寺には享祿四～天文三(1531～34)年の間、足利義晴の仮幕府が置かれている。また天文十八(1549)年には「石寺新市」文字がみえる(『今堀日吉神社文書』)。

天文二十一(1552)年、16世紀において六角氏の権力を確立した六角定頼が死去した。また弘治三(1557)年には定頼の兄氏綱の後継者で、「江州宰相」(『鹿苑日録』)と呼ばれた六角秀長(義実)が没している。

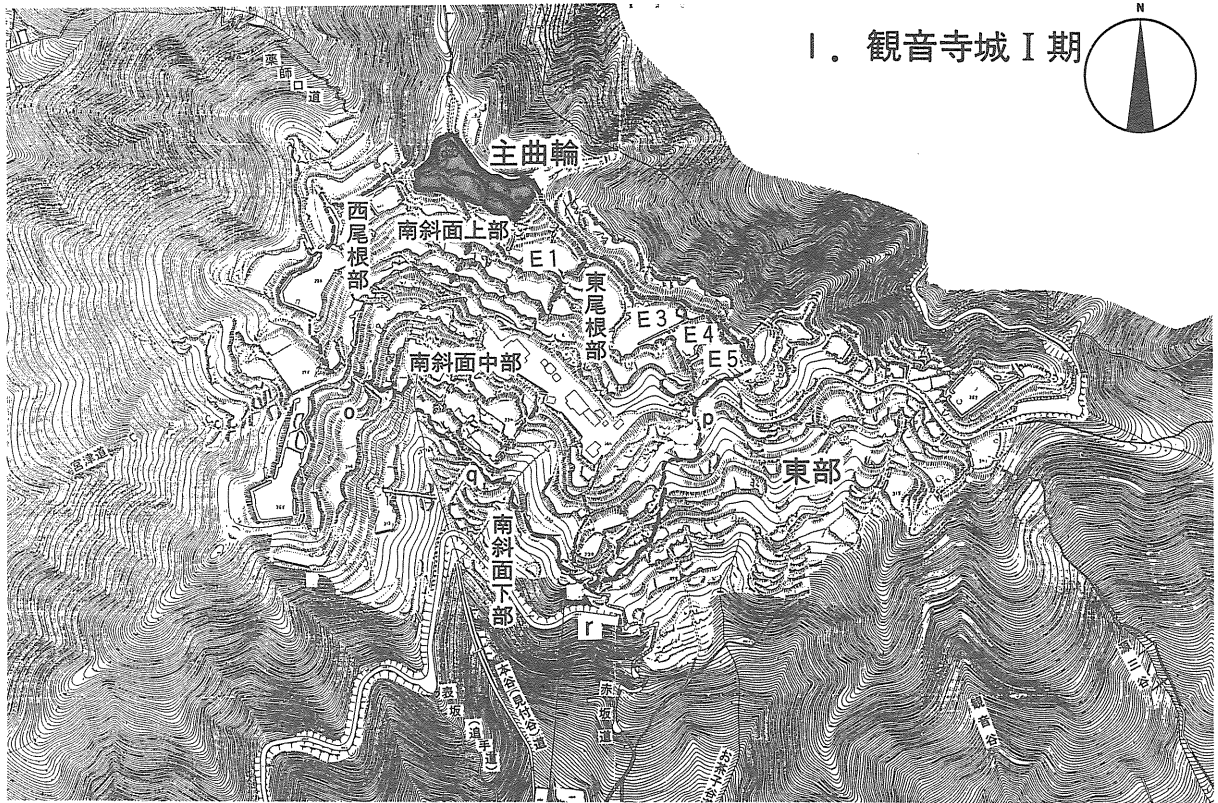


図5 観音寺城変遷図 (S = 1 / 8,000)

B. 観音寺城Ⅱ期(図5-2)

現況のプランがほぼ確立した段階である。観音寺城Ⅱ期の年代は、W4やS1・5等から出土した土器から16世紀中頃とみられている。Ⅱ期は複数の曲輪によって構成される内城と、これを広く囲む外城、この外側に広がる外域に分かれるとした。

a) 内城 Ⅱ期の内城はⅠ期においての山頂部のみに加えて、西尾根部と東尾根部の大部分がそれぞれ付加系の曲輪として再編成された。これらの部分を加えて内城と呼称する。

b) 外城 外城は、虎口h、虎口i、虎口m、虎口p、虎口r、虎口sによって防御された圍繞系の曲輪である。規模は差し渡しで700mである。

虎口hはこの虎口のみ喰違になっており、虎口は西面し、北は長さ10m、高さ3mの石垣が北に延びる。虎口lは間口が5.2mで、「宮津口見付」と伝えられる。虎口pの「権現見付」は間口4m、前面の城道に、横矢を懸けることのできる平坦面が確保されている。虎口rは「閼迦坂見付」、虎口sの「本谷見付」は後世の改変によって不明な点が多い。

c) 外域 観音寺城外城虎口sの外側には城下町「石寺」が、虎口p・qの外には東部域平坦面群が存在する。虎口sの設定による城域の拡張は、城郭と城下町の一体化を狙ったものとみられる。

また虎口f・lの強化は桑実寺や後述する「常楽寺」をも観音寺城の直接的な影響下に包括する意図があったものともみられる。

d) 小括 観音寺城Ⅱ期は、①-内城を拡大し、中枢機能の拡張を計り、主曲輪を中心とした放射状複合構造を採る内城に改変した。

②-南尾根部と虎口s構築による外城の南及び麓への拡張による戦時における兵力や物資の収容能力を増大させ、「石寺」との一体化を計った。

③-虎口は防御線上に設けられた「門」、門外に門幅より広い平場を確保する「虎口空間」、門内の「控の空間」で構成されていると考えている。観音寺城Ⅱ期の虎口ではその規模によって異なるが、虎口空間が未発達であるのに対し、控の空間は或る程度発達している。また内城の主曲輪虎口a・c・d、西曲輪虎口e・f・g、東曲輪東虎口j、外城の虎口h・l・m・p・r・s等主要虎口は石垣化され

ている。

④-南尾根部と虎口s構築による外城の南及び麓への拡張によって、城下との一体化が指行され、城下石寺が外域化されたことにより、主郭を中心とした同心円構造が更に強化された。

⑤-山頂の主曲輪・西曲輪・西尾根上のW4・S1~5等、城域西部の石垣化である。

①の東曲輪・西曲輪の形成は観音寺城が山頂の主郭を中心とする単純な同心円構造を脱し、中心部の主曲輪を核とし、周囲に曲輪を放射状に配置することによって求心性がより強化された城郭へと改変されたことを示している。

ここで興味深いのは西曲輪の存在である。西曲輪は織山山頂の主曲輪と、城主の日常生活の中心とみられるW4を結合する存在である。そして東曲輪と異なりほぼ防御線が石垣化されている。また西曲輪に面する虎口dは主曲輪最大の規模を有し、主曲輪-西曲輪の結合度は他よりも強いとみられる。

⑤に関しては後述するが西方を指向する内城の虎口fは城内で最も複雑な構造を持ち、外城の虎口lは城内最大の虎口である。これらのことは観音寺城Ⅱ期が西方「常楽寺」を強く意識していたこと示し、「常楽寺」の城下町化が指向されたものとみられる。⁽¹⁾

6. 各遺跡の概要－5

「常楽寺」(図6)

六角の後継者義賢は、観音寺城西方2kmの「常楽寺」に江雲寺を建立しこれを定頼の菩提寺とした。

「常楽寺」は湖東地域において最も内陸に設けられた湊を有し、水上交通と陸上交通の結接点であった。後の「下街道」はここにアクセスし、太平洋に面する伊勢の「桑名」から「八日市」に延びるルートは、更に「常楽寺湊」に延びていた。そして「常楽寺湊」から琵琶湖を渡って「今津」に至り、六角氏の息がかかった保内商人も通商権を持つ「九里半越」の先に在る若狭の「小浜」は、日本海航路の中に位置付けられていた。⁽¹²⁾

またこの地域は日本の東国と畿内を結ぶルート上に位置しており、「常楽寺」は日本の中央で、日本の太平洋側と日本海側、畿内と東国を結ぶ十字路の役割が期待されていたものとみられ、ここに菩提寺を置いて「常楽寺」を六角氏当主が実効支配し、流通経路の掌握を意図したとみられる。

この「常楽寺」周辺の現大字上豊浦・慈恩寺・小中には六角氏関係の宗教施設が多く存在している。小中には六角氏の氏神沙々貴神社が古くから鎮座し、一族の崇敬を受けていた。また常楽寺の地名は同神宮寺の名によるとされる。また若宮八幡神社の神紋は六角氏の四目結である。若宮八幡神社に近接する六角山正念寺は弘治三(1557)年に六角義実が開基したと伝えられる。⁽¹³⁾

更に大字常楽寺の西、大字慈恩寺には六角氏の菩提寺慈恩寺・威徳院が既に建立されており、慈恩寺の遺構とされる浄厳院楼門の解体修理の結果、この門が16世紀中頃に建立されたことが明らかにされた。

また慈恩寺の西の小字金剛寺は、近江八幡市金剛寺に建立されていた六角氏の菩提寺金剛寺を16世紀中頃に移したものの遺称と考えている。

このように「常楽寺」は六角氏色が強くなってゆく反面、古くからの常楽寺領主木村氏は16世紀初頭に野洲町北村に居館を移している。⁽¹⁴⁾

安土町豊浦からは「常楽寺」に伴うとみられる濠が検出されており、先述した金剛寺城の「金剛寺衆」が「常楽寺」に移転した可能性も考えられる。

以上を勘案すると「常楽寺」の規模は、豊浦の濠

から正念寺迄が推測され、差し渡し1,000mに及ぶかともみられる。

更に、「常楽寺」から西へ延びるルートは、慈恩寺北側を通り、16世紀初頭には存在していた大町(近江八幡市長田町)、六角氏の尼寺永明寺が所在した西庄に沿いながら、屈曲して延びている。この道路の方位は条里地割と若干方位を異にし、上豊浦から常楽寺付近の東西街路とほぼ同じであり、「常楽寺」内の街路を延長したものとみられる。

この一部は平成5年に浄厳院の西で行われた発掘調査で、条里方位の溝を埋め立てて、現在残る道路が形成されたことが明らかにされている。⁽¹⁵⁾

また「常楽寺」から沙々貴神社、更に常楽寺山に至る帯状の地域は、方位こそ条里地割と同じくするも、その土地区画は「常楽寺」から延びる道路によって規制されており、ここにも「常楽寺」の影響が認められる。よって「常楽寺」から西に向かって方位を同じくして屈曲しながら延びる一条の道路に沿う2km、南東に向かって常楽寺山に向かって延びる長さ1kmの帯状の範囲が「常楽寺」の影響を受けた範囲といえる。この範囲は西を六角氏の尼寺である永明寺が所在する西庄、南東が六角氏の氏神である沙々貴神社に限られることから六角氏によって施工されたものとみられる。

このように観音寺城の西方2kmには、江雲寺や正念寺を中心として纏められた六角氏色の極めて強い観音寺城の外港菩提寺都市とでも呼称できる「常楽寺」が成立していたことが推測できる。⁽¹⁶⁾

よって観音寺城南西尾根の総石垣化は、六角氏の「常楽寺」の形成と連動したものとみられる。

「常楽寺」に面する観音寺城西方は観音寺城西面に延々と築かれた石垣に開けられた宮津口見付を起点とした道路に連なる「常楽寺」の疑似城下町化を強く推進していた表れとみる。

これに対して城下町「石寺」は「石寺新市」・観音正寺の存在等が伝えられるものの、六角氏の菩提寺の存在などは伝えられておらず、観音寺城城下町と云いながら、六角氏色は「常楽寺」と比較にならない。ここに観音寺城城下町「石寺」と外港「常楽寺」の差がある。



図6 「常楽寺」関連図 (S = 1 / 25,000)

7. 各遺跡の概要—6

安土城及び城下町遺跡⁽¹⁷⁾(図7)

「安土」は1570年に織田信長によって築かれた。

a) 中核曲輪群(内城) 安土城の中核曲輪群(内城域)は先鋭化した東海系近畿型Aのプランを採用する。主郭は天主への入り口が設けられた上段部分。前郭は本丸と伝えられる下段の部分で、近畿型Aのプランが南北に圧縮された形態をとり、天主台が主郭と前郭にまたがって設けられている。

前郭の西虎口は門両脇の石垣を門ごと後退させその両側面から門の前面に横矢が掛るように計画されている。この門の前方には30×20mの東西に長い平坦面がテラス状に張り出しており虎口空間を形成している。

前郭は発掘調査が行われており、『信長公記』に記載のある「三御門」「南殿」とみられる遺構が認められる。

また主郭と前郭の西半分は腰曲輪によって囲繞されている。

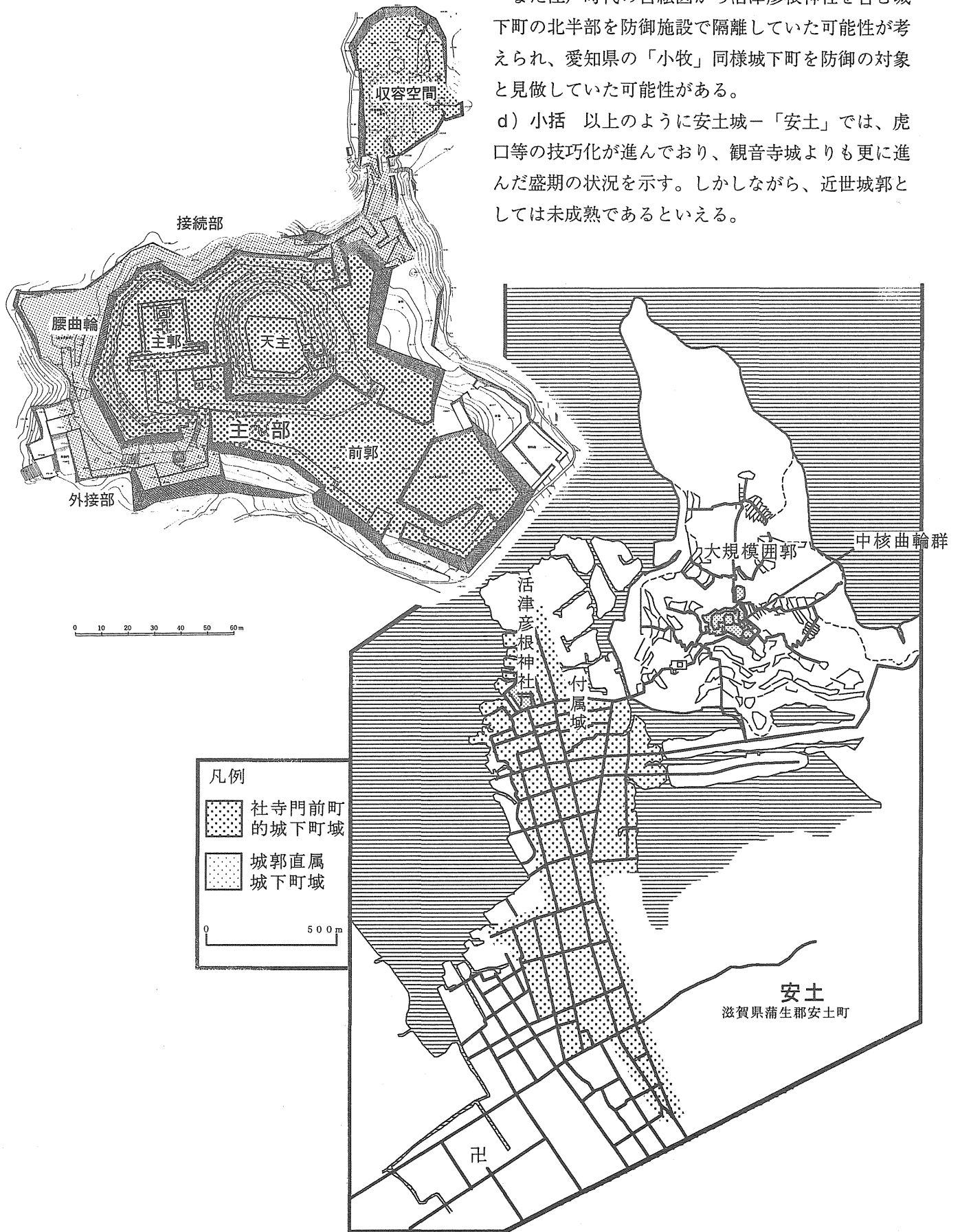
これを私案の近世城郭における基本的な構成にあてはめると、主郭と前郭が主部を形成し、腰曲輪が接続部と外節部の機能を果たしており、主郭(前郭の一部)や「伝八角平」が収容空間と機能していたとみられる。

近世城郭の構成としては主郭が2郭に分離していること、接続部が三方に延びる尾根線の2方にしか対応しておらず、未成熟であること、収容空間が未発達であることが挙げられ、全体的に未発達の印象が得られる。

b) 囲郭(外城) 囲郭は安土山全体と捉えるか、千田氏が総構とした部分の一部と捉えるか筆者も迷うところである。

発掘調査によって、中核曲輪群に向かって真っ直ぐ延びる幹線道、これに面して門を開く屋敷跡等が検出されている、私案の大規模囲郭に分類できる。

c) 城下町(付属域) 城下町は活津彦神社の門前町的な形態をとって集中的に計画されているとみられ、「観音寺」のような散在性は極力抑えられており、これを城郭を中心とした同心円構造の城郭運用集団居住域に切り込ませることによって城郭との一体化が計られている。



また江戸時代の古絵図から活津彦根神社を含む城下町の北半部を防御施設で隔離していた可能性が考えられ、愛知県の「小牧」同様城下町を防御の対象と見做していた可能性がある。

d) 小括 以上のように安土城-「安土」では、虎口等の技巧化が進んでおり、観音寺城よりも更に進んだ盛期の状況を示す。しかしながら、近世城郭としては未成熟であるといえる。

図7 「安土」

8. 各遺跡の概要一 7

八幡城及び城下町遺跡⁽¹⁹⁾(図8)

a) 中核曲輪群(内城)

曲輪群は主郭とこれを取り巻く主郭腰曲輪、これに接続される前郭からなり、東海系近畿型Bのプランを採用する。主郭東門の前には20×10mの平坦面が確保されており、虎口空間を形成している。

前郭の西門は南面し主郭東門虎口空間の直下に設けられ、主郭と前郭の2曲輪によって防御されており、安土城より更に進んだプランを導入している。

全体の構成は主郭が主部、主郭腰曲輪が接続部、前郭と「出丸」が収容空間として機能していたとみられる。

八幡城を含む東海系近畿型Bは、兵庫県の出石城、大阪府の豊臣期大坂城、神奈川県石垣山城、佐賀県の名護屋城、山梨県の甲府城等に認められ、豊臣政権の中核に近い集団の城郭に多く用いられている。

b) 囿郭(外城) 囿郭は三角形を呈し、南を底辺とすると、これを八幡濠によって画し尾根筋を防御線として、その頂点に中核曲輪群を配置する構造である。内部には居館を設け八幡濠との間に家臣集団の集住地が形成されている。

c) 城下町(付属域)⁽²¹⁾ 城下町は八幡神社の門前町的な部分と城郭に直属する部分に分けられるが、両者は一体的に計画され長方形街区を形成する。但し八幡神社の門前町的な部分は長方形街区がやや歪んでおり、微高地上に設けられているのに対して、城郭に直属する部分は低地に立地しており両者には違いが認められる。城下町施設は散在すること無く付属域に集約的に配置されているが、城下町の一部、あるいは全部を取り込んだ総郭は形成されていない。

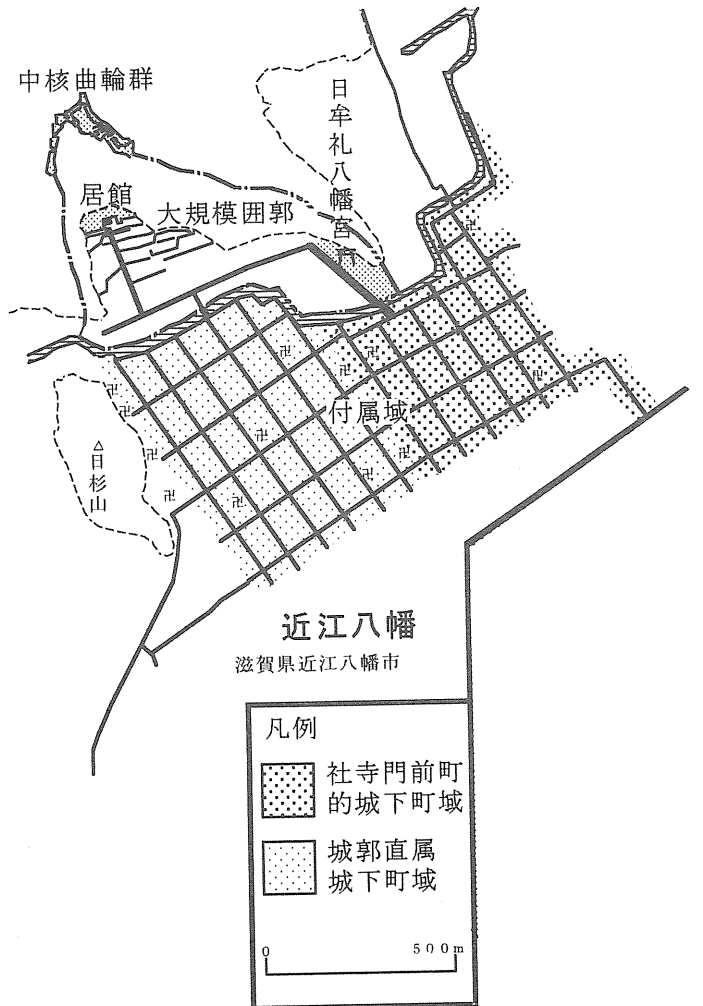
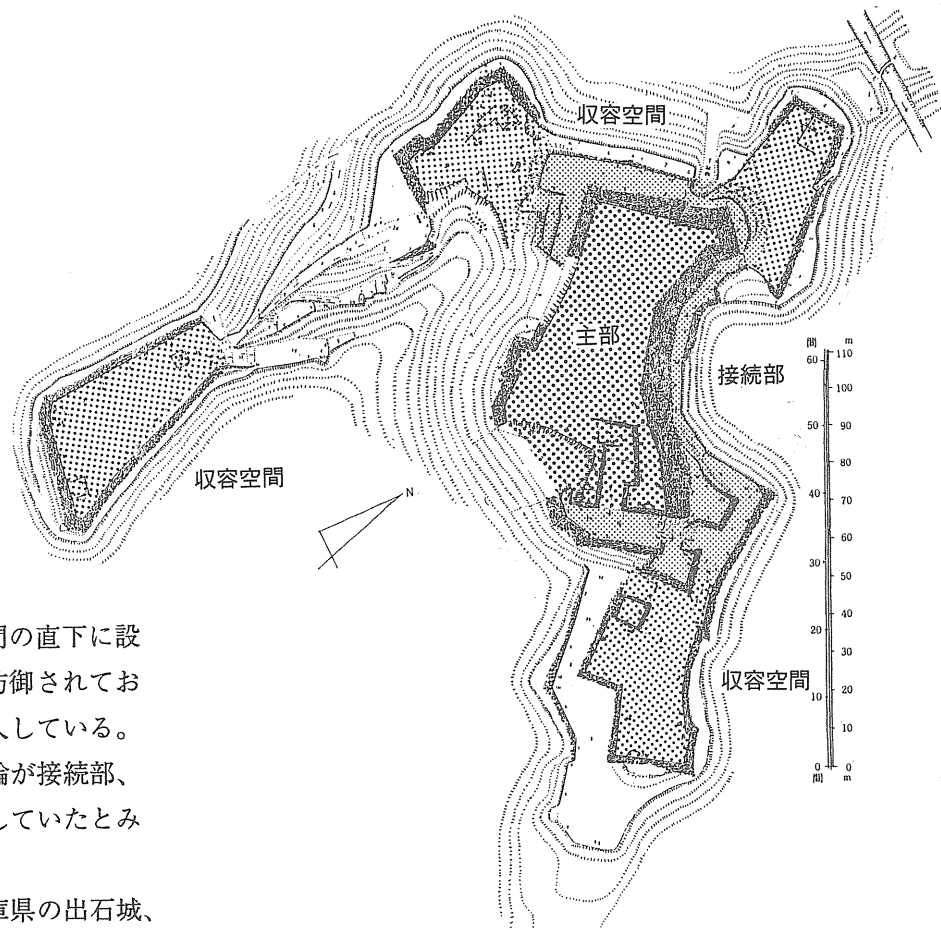


図8 「近江八幡」

9. 城館構造の変遷

慈恩寺の居館集落は15世紀から16世紀初頭、金剛寺城Ⅲ期は16世紀の前葉、観音寺城Ⅱ期は16世紀中頃に、「安土」及び「八幡」は16世紀後半にそれぞれ時期を設定できる。

次にプランの相似から慈恩寺の居館集落が最も古く、これに石寺の居館集落、観音寺城Ⅰ期がつくと考えられる。また金剛寺城Ⅲ期と観音寺城Ⅱ期は同相である。

これらを纏めると、当該地域の大規模な集住形態は5段階に分けることができる。

1段階は安土町金剛寺遺跡Ⅰ期(慈恩寺の居館集落)・金剛寺城遺跡Ⅰ期にみられるような居館集落の段階で、防御施設を有するのは居館のみである。

2段階は石寺の居館集落・観音寺城Ⅰ期にみられるような居館を内城とし、この外側に防御線を設定する段階である。

3段階は金剛寺城Ⅱ・Ⅲ期、観音寺城Ⅱ期にみられるような、内城が複郭化し求心性が強化された中核曲輪群を形成する段階である。そして更に観音寺城では城郭、「石寺」「常楽寺」を中心とした散在的ではあるが有機的に結合された集住形態が形成される。

ここで問題となるのは金剛寺城Ⅲ期と観音寺城Ⅱ期が同形態となることである。

金剛寺城Ⅲ期は発掘調査の出土資料の分析から16世紀前葉に位置付けられ、中葉には廃絶した可能性が考えられる。これに対して観音寺城Ⅱ期は16世紀中葉に同心円構造から金剛寺城Ⅲ期と同じ構造に改修されたと想定される。

城郭の構造上の変遷や発掘調査の成果からみれば、金剛寺城Ⅱ期→金剛寺城Ⅲ期→観音寺城Ⅱ期と展開していったと考えるのが適当である。

このことは金剛寺城で形成された集団が16世紀中葉に至って観音寺城に移動してきたことを示すと考えられる。伝承では六角氏の本城は金剛寺城から観音寺城へと移動したと伝えられ、これを裏付ける成果が得られたわけである。

また16世紀前葉には観音寺城Ⅰ期-「石寺」、金剛寺城Ⅲ期が併存していたことを示している。では16世紀前葉にそれぞれを使用したのはどのような集

団であったのであろうか。

六角氏の家系は高頼の息子の代で2系統に分かれる。1つは氏綱系で將軍の身辺に在って活動したとみられる。もう一つは定頼系で近江に在ってこれを支配した。定頼は当初僧籍にあったが、還俗して武將として活躍するようになり、近江に在って観音寺城からこれを支配した。当初定頼は金剛寺城に在って、金剛寺城Ⅱ期からⅢ期への変遷も定頼の武將としての成長に伴うものとする。

これに対して氏綱系は近江の支配を定頼に任せ將軍の近臣として活動したと考えられ、16世紀中葉には観音寺城を定頼に明け渡したと考えられる。このような背景が観音寺城Ⅱ期の構造に影響をもたらしたと思われる。

4段階は安土城及び城下町にみられるような、内城が技巧化し求心性がより強化され、社寺門前町的な城下町が城郭に密接して形成された段階である。

5段階は八幡城及び城下町にみられるような、内城の技巧化、求心性が更に強化され、社寺門前町的な城下町とは別に城郭に直屬する城下町が形成される段階である。

10. 結語

前節まででは湖東地域中央部の大規模な遺跡を時代順に並べそれぞれ特徴を述べた。この時期は中世から近世へと時代が遷移する変換期でありこれらの遺跡群のなかに中世と近世の境界をみいだすことができると思う。1段階とした慈恩寺の居館集落は規模的にも小さく構造も単純で中世居館集落の典型的な事例と見做すことができる。

これに対して2段階以降は規模的にも大きく構造も複雑で、1段階とは異なっている。ここに中世と近世の境界を設定したいと思う。

また2段階以降の近世も、集住形態が分散する2・3段階と、城郭を中心として居住域が面的に拡がる4・5段階に分けることができる。2・3段階は近世の最初期として先近世と位置付け、4・5段階の近世とは一線を画することができると思う。

以上湖東地域中央部の大規模な集住形態を時期別に並べ、中世と近世の画期、更に近世の初期段階の設定を行った。

本稿では湖東地域中央部の大規模な遺跡を概観することによって、中世から近世の移行期における大規模な集住形態の変遷を把握することができたと思う。

- (17) 註(5)に同じ
- (18) 註(5)に同じ
- (19) 註(5)に同じ
- (20) 註(5)に同じ
- (21) 註(5)に同じ

謝辞

本稿を為すにあたって、伊達宗泰先生、秋田裕毅、稲垣正宏、北村圭弘、坂田孝彦、横田洋三の各氏に貴重な御助言、御教示をいただきました。

(むらい たけふみ：企画調査課主任技師)

註

- (1) 拙稿A. 「中世における居館を中心とした集住形態について」『紀要』第13号 財団法人滋賀県文化財保護協会 2000
- 同B. 「観音寺城下町「石寺」の構造」『観音寺城跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県教育委員会 2000
- 同C. 『ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書-6 金剛寺遺跡 金剛寺城遺跡金剛寺遺跡・金剛寺城遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県教育委員会 1996
- 同D. 「近江観音寺城の存在形態」『紀要』第13号 財団法人滋賀県文化財保護協会 2000
- 同E. 「日本近世城郭の基礎構造」『花園史学』第一七号 1996
- 同F. 「日本近世城郭の基礎構造Ⅱ」『花園史学』第一八号 1997
- (2) 拙稿 註(1)A参照
- (3) 拙稿 註(1)B参照
- (4) 拙稿 註(1)C参照
- (5) 拙稿 註(1)E・F参照
- (6) 註(5)に同じ
- (7) 註(5)に同じ
- (8) 坂田孝彦 『安土町埋蔵文化財発掘調査報告書第33集 安土城下町遺跡十七地区19次調査発掘調査報告書』安土町教育委員会 2000
- (9) 註(5)に同じ
- (10) 滋賀県教育委員会『観音寺城跡整備調査報告書』1971
- (11) 佐々木哲 「天文期六角氏系譜の研究 -六角氏綱の子孫の實在について-」『戦国史研究』第30号 1995
- (12) 拙稿 註(1)D参照
- (13) 『滋賀県の地名』平凡社1991
- (14) 『野洲町史』第一巻 1987
- (15) 「常楽寺」の構造に関しては、発掘調査報告書が或る程度揃い次第別稿を立てる予定である。
- (16) 註(5)に同じ

編集後記

今回は8編を数える多数の論文を掲載することができました。内容も、縄文時代から近世までと各時代の研究論文のほか、普及事業についての報告もあり、バラエティに富んだものとなりました。

埋蔵文化財を取り巻く環境は年々厳しくなっていますが、我々の調査・研究の成果をわかりやすくお届けできるよう、今後も様々な形で努力していきたいと思えます。

(T. K)

平成13年(2001年)3月

紀要第14号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668